

# グロテスク～ Aゴシックすごい

GE Gravenによる

## 第1巻

### 「復活」



## 第1章



エデンだけがそれに匹敵する。静かな霧に包まれた、穏やかな山の森は

そこは完璧で手つかずの楽園、いや、汚染されていない創造物そのものだった。騒々しい鳥たちが緑の葉が茂る木々の梢を飛び交い、朝日は木々の梢を透過し、霞を通して斜めに差し込む色とりどりの光の断片を投げかけていた。霧は時折、根や幼虫を観察する彷徨う動物のために分かれ、そして再びその生き物を飲み込み、かつての姿、途切れることのない半透明の壁へと戻っていった。一枚の葉が陽光の筋の中をゆったりと螺旋を描きながら、霧の中に消えていった。

葉っぱが最初の葉を垂らし、さらにまた葉を垂らした。鳥たちは静まり返り、日差しは弱まった。

そして、それは始まった。

霧は逃げ惑う野生動物で渦巻き始め、葉や小枝や羽が雨のように降り注いだ。

木々は、明るい鳥の群れのように空へと飛び立った。山々は轟き、木々は揺れ、大地は打ち鳴らされた銅鑼のように鳴り響いた。その不吉な鐘の音が最高潮に達した時、醜悪な翼を持つ生き物の大群が山頂を越えて押し寄せてきた。キュクロプスのように木のように高くそびえ立つものもいれば、キメラのように人間の子供ほどの背丈しかないものもいた。皆、戦闘服を身にまとい、膜状の翼を激しく振り回し、爪で剣と盾を掴んでいた。天使、巨人、そしてグロテスクな怪物たち、すなわちグリゴリ、ネフィリム、エルジョ、ゴルゴン、タイタン、そしてキュクロプスの軍勢は、何千もの群れとなって山腹を一齐に流れ下り、破壊の雪崩となって押し寄せた。轟音を立てる炎の最前線で、真っ黒な目をした天使の一団が、降りてくる大群を影に覆われた谷へと導き、斜面に沿って大きく道を切り開き、森を押しつぶしていった。その邪悪な軍勢の跡には、生きとし生けるものは何も残っていなかった。

そして、その騒乱は、来た時と同じくらいあっという間に消え去った。

荒廃した風景は、それ以来の破壊と同じくらい完全な静寂に包まれた。やがて、第二の群れが通過するにつれて大地がうめき声を上げ始めると、ゴングが鳴り響いた。今度は山を越えて、最初の群れとよく似た装束をまとった天使の別の軍団がやってきたが、全く別の種族として分類されるに値するほど異なっていた。これらの生き物は、悪魔というよりは大きな男女に似ていた。

彼らの目はどちらも黒かったが、怒りよりもむしろ真剣さが勝っていた。

生き物たちの群れは山の頂上で立ち止まり、眼下に広がる惨状を見下ろした。先頭に立つ天使ミカエルは振り返り、何千もの合唱隊のような声で語りかけた。

「ここには欺瞞が織り込まれている。奴らはここに留まっている！」彼は、一見すると人影のない下の斜面を振り返り、大声で叫んだ。「セムジャザよ、お前には安息はない！呪文を解け！」

「ケルベロス！アラキエル！」返事はなかった。「姿を見せろ！玉座の命令だ！」天使は咆哮した。

さらに2つの天使軍団が空から降りてきて、その数はほぼ視界を遮った。

太陽がミカエルの陣営の中で光る前の姿。これらはガブリエルとラファエルの軍勢であった。ミカエルは彼らに語りかけ、「セムヤザとその軍勢は下にいる。

ケルベロスもまた我々を裏切った。なぜなら、彼は自らの陣営を」

突然、倒れた木が天使アラキエルに姿を変え、ミカエルに向かって突進しながら、その真の姿を現した。

「マイケル！」ラファエルは警告した。

マイケルはぐるりと回転し、剣を空中に突き上げた。アラキエルは剣を振り下ろし、彼に斬りかかりながら、剣が彼女を貫く瞬間にも悲鳴を上げた。彼女は地面に叩きつけられ、怒りに満ちた塵の塊となって爆発した。

「セムヤザ！」マイケルは叫んだ。「お前の欺瞞は裁きから逃れることはできない。」

開けた場所に足を踏み入れた。「ここにもう一つの門があるはずだ」とマイケルは叫び、剣を地面に突き刺した。再び山が揺れ、マイケルが輝く剣を引き抜くと、傷ついた大地から血が噴き出した。

悲鳴が空気を切り裂き、岩塊に見えたものが、胸の大きな傷口を押さえてよろめくセムヤザの姿に変わった。「ケルベロス！」と彼は叫んだ。「剣を折れ！傷口を塞げ！」セムヤザが倒れると、彼の呪いは解け、風景は一変した。倒木や岩が乱雑に散乱していた場所に、今や何千もの悪魔の軍団が姿を現し、荒廃した山腹にうずくまっていた。

すると、そのうちの一体が山の斜面を駆け上がってきた。それは、犬のような三つの頭、歯をむき出しにした牙、そして蛇のように鞭打つ尻尾を持つ、恐ろしい天使 ケルベロスだった。嵐のような勢いで風が吹き荒れ、雲が渦巻き、空はあっという間に暗くなっていった。

「エゼキエル！」セムヤザは叫んだ。「雲よ！剣を折れ！」セムヤザは少し転がり、死んで塵の雲となって消えた。セムヤザの軍勢は攻撃を仕掛け、ケルベロスに続いてミカエルのいる山腹を登っていく。山頂にいた三つの軍団は静かに後退し、ひざまずいて頭を下げた。渦巻く雲から黒い渦が降りてきて、地上へと落下した。地面が隆起し、ミカエルの剣がつけた傷口から岩が隆起した。渦は粗い石を包み込み、黒く磨き上げ、激しい動きで石を形作り、刻み込んだ。混沌の中から、磨かれた長方形が現れ、その五つの面には何百もの複雑な円形と直線のシンボルが刻まれていた。

出現したモノリスはケルベロスの進撃を敗走へと変えた。攻撃部隊は一斉に方向転換し、山を下って逃げ出した。黒い瞳には血への渴望が消え、恐怖が宿っていたが、時すでに遅し。門は完成していた。逃げる天使たちは、まるで空気が粘り気を帯びたかのように速度を落とし、逃げようともがくうちに動きを止めた。旋風は彼らを吸い込み、容赦なくその中心部へと引きずり込み、一人残らずモノリスに飲み込まれていった。最後の一人が消え去ると、モノリスの中心部は燃え尽き、その中心にはぽっかりと大きな穴が開いた。渦は天へと昇り、雲は回転を緩めた。静寂の中、天使たちは新しくできた門から立ち昇る蒸気のシューという音を聞いた。

滑らかな黒い一枚岩は、高さ10フィート、幅5フィート、奥行き2フィートで、見える部分はずべて天使の言葉と神自身の言葉で書かれた詩で覆われていた。その一枚岩のガラスのような黒い表面は、最高級の鏡のように完璧に滑らかで、中央の穴は完璧な形状をしており、直径1フィートで石の幅方向に穴を開けていた。その石の印章は完璧だった。

ひざまずいていた天使たちは立ち上がった。ミカエルはガブリエルの方を向いた。「残りの監視者たちはウールの丘に身を潜めている。」ガブリエルは剣を撫で、山腹を登り始めた。

「ガブリエル！」マイケルは彼の後ろ姿に呼びかけた。

ガブリエルは歩みを止めずに肩越しに振り返り、ミカエルが「彼らは玉座の命令により、自らの剣で殺されなければならない」と付け加えた。ガブリエルは肯定の合図として手を振り、大きな石の上に飛び乗ると、軍団の頭上に向かって「ウールの谷へ！最後のグリゴリへ！」と叫んだ。ガブリエルは軍団をしっかりと従え、西の地平線に向かって疾走した。

「アザゼルはどこへ逃げたのだ、ミカエル？」ラファエルは多くの声を代弁するように尋ねた。

「彼はハラダンの砂漠の山々に飛んで行った」とマイケルは答えた。「彼は誓いを立てたルシファエルとの同盟だ。アザゼルは、彼女のより多くの軍勢による保護と引き換えに、彼女の王位継承権を支持している。」マイケルはシューシューと音を立てるモノリスを調べた。二人は石の封印の周りを回りながら、マイケルは続けた。「そして、バタレルの多くの軍団がすぐに彼女の陣営に加わる。」マイケルは言葉を止め、ラファエルに目を向けた。彼の眉間には不安の色が浮かんでいた。

「もし彼らが団結すれば、ルシファエルは必要な数を手に入れる。ネフィリムもまた彼女の陣営を強化する。そして彼女は何よりも玉座を望んでいるのだ。」

ラファエルは振り返り、剣と翼で構成された広大な天上の軍勢に向かって咆哮した。

「我々はバタレルの軍勢と残りのネフィリムの大群に立ち向かう！」天使の半数が東の天に飛び込み、ラファエルの後ろに空中の隊列を組んだ。

するとマイケルは残りの者たちに命じた。「ルシファエルの新たな軍団への攻撃のために整列せよ！彼女は我々を待ち構えている。だが玉座が我々の道を照らしてくれる！以前と同様、まずは巨人や地上の悪魔を討伐する。我々は一体となって進むのだ。ためらうな！」マイケルの背後の空に、白い翼と輝く鎧の雲が爆発し、立ち尽くしていた封印は消え去った。

こうして印章は600年近くもの間、風雨と時の流れに覆われ、塵が積もり、土や岩の層に埋もれ、ひっそりと佇んでいた。アジア大陸の奥深くに埋もれ、まるで交尾するカゲロウのように、幾十年もの歳月が過ぎ去る間、静かに眠り続けていたのだ。

地上の事柄を司っていた監視天使とグリゴリ天使が滅びた後、この良き地球を見守る存在として残ったのは人間だけとなった。そして、人間は何世代にもわたってその役目を果たした。そして、人間が神の庭の手入れをしている最中に、埋もれた門を発見した。神の起源であるとして、彼は幾世紀もの時を消し去り、それを祀り、その上に神殿を建てた。さらに半千年の間、彼はその遺物を秘密にし、それを崇拜し、イエスはそれを中心に人生を歩まれた。そしてついに、封印を解くのに十分な知識を得たにもかかわらず、それを試みるほど愚かなままだった。

～\*～

中国中部 ～ 1331年6月

数百羽のハトが、装飾豊かな中国寺院の巨大な屋根に並び、わずかな軒先スペースを巡って鳴き交わし、互いにつつき合っていた。

そしてまた、一羽の鳥が混雑した尾根から飛び立ち、大きく旋回して、群衆は人混みに紛れて消えていった。岩棚の下では、何十年にもわたる鳩の糞が石の表面を灰色と白の筋状に染めていた。等間隔に並んだ台座の上に置かれた石像が、鳩の巣棚から突き出ている。それぞれが、高さ4フィート（約1.2メートル）で、膜状のコウモリのような翼を持つ、グロテスクな石の獣を象っていた。

これらの石像の中には竜のような姿のものもあれば、人間と獣が混ざったような姿のものもあり、また人型でありながら原始的な外見のものもあった。翼を広げてしゃがんでいるものもあれば、翼を折りたたんでいるものもあり、その両方を組み合わせたものも数多く存在した。像の細部やランダムな姿勢はまるで生きているかのようで、それらは石の中に閉じ込められた生き物だった。四方八方に突き出し、神殿の頂上全体を覆うように並んでいた。

寺院自体は非常に古く、千年前に切り出された不規則な石板で構成されていた。建物の外壁には、風化した彫刻で描かれた空飛ぶ悪魔がびっしりと刻まれており、中でも最も多く見られるのは、翼を広げたの像で、中心を共通とする三つの円で完全に囲まれていた。寺院の正面には三つのアーチ型の入口があり、中央のアーチは両側のアーチよりも高くそびえていた。

翼のある獅子のような獣を象った高さ8フィート（約2.4メートル）の石像が3体、それぞれのアーチの左端を守っており、3つのアーチの上部にはそれぞれ特徴的な中国語の碑文が刻まれていた。右から左に読むと、全体として「飛寺」と訳せる。

寺院は手入れの行き届いた庭園に囲まれ、丸みを帯びたチーク材の橋がゆらゆらと揺れていた。蛇行する小川を渡ると、盆栽や岩が並ぶ内庭の向こうには、果樹園やナツの木々、小さな広葉樹林が広がり、やがてより自然のままの山林へと続いていた。整えられた庭園と手つかずの森の端には、樹齢を重ねた在来種のイチヨウの木に中国ツグミが止まり、穏やかな鳴き声を響かせていた。午前中の陽光が、小道や池に木漏れ日を落としていた。

黒衣をまとった僧侶の一団が森から蛇行しながら現れ、石畳を厳かに下りていった。

建物へと続く通路。彼らは頭を下げ、両手を前に組んで、霧のように通路を漂っていった。死人のように静かに寺院へと入っていった。内部では、無数のろうそくがあらゆる水平面で燃え、穴の開いた香炉から甘い香りの煙が立ち昇っていた。ろうそくと香の香りが相まって、寺院の壁に囲まれた空間に、重厚な霊的な雰囲気醸し出していた。絹の衣をまとった僧侶たちは、前の部屋よりも広い三つの部屋を順番に進んでいった。

広大で、凹型の天井は司祭たちの頭上高くまで達していた。空飛ぶ獣の彫刻天井のドームをぐるりと囲んでいた。無数の交差する線と碑文がその湾曲した表面を彩り、まるで詳細な天体図のように見えた。

部屋の中央、磨き上げられた床には、完璧な対称性を持つ円形の穴が開けられていた。その穴は大きく、深さは13フィート近くもあった。神殿の床と同様に、穴の円筒形の壁も滑らかに磨かれており、神殿の床から13フィート下の穴の中央には、石の印章が立っていた。6万年の歳月が流れてもなお、門石は監視者たちと天界の大部分を飲み込んだあの日と変わらず、傷一つなく、そのままの姿でそこに立っていた。

痩せこけた4人の僧侶が、足を折り曲げ、ローブを肩からずらして細い胸と細い腕を露わにして、穴の縁近くに座っていた。彼らの衰弱した様子は、長期間の断食の証拠だった。汗が彼らの引き締まった首と骨ばった肋骨に光り、彫像のように座る彼らの目は、くぼんだ眼窩の底で燃えるように輝いていた。

深い瞑想にふける僧侶たちの行列は、4人の僧侶を取り囲むように進み、肩を寄せ合って座り、僧侶たちと瞑想室を囲む堅固な壁を作った。さらに多くの僧侶が到着すると、彼らは2つ目の輪、そして3つ目の輪を作り、瞑想する聖者たちの3つの同心円が部屋を満たした。深い静寂の中、時折揺らめくろうそくの火の音が、遠くの雷鳴のようにドームに静かに響き渡った。

まもなく、さらに3人の僧侶がその場に現れた。2人は大きなろうそくを携え、3人目はその2人の間を歩いていた。その僧侶は、まるで生血のように真っ赤なローブを身にまとっていた。彼は手に古びた巻物状の羊皮紙を持っていた。3人の僧侶は僧侶たちの輪の先で立ち止まり、赤いローブの僧侶が巻物を広げると、中国語の文字が並んでいた。その羊皮紙には、門石の表面に刻まれた詩句の翻訳が記されていた。

寺院の外、境内では、穏やかな小川のせせらぎだけが聞こえていた。ツグミが突然飛び立ち、庭の花々の間を蜂を追いかけた。小鳥のくちばしが蜂を空中で叩き落とした瞬間、爆発音が響き、瞬時に

神殿のドームが粉々に砕け散り、石の破片が数百フィートも空中に舞い上がった。衝撃は非常に激しく、近くの木々の葉は跡形もなく吹き飛ばされ、花崗岩の破片や人骨が焼け焦げた幹に突き刺さった。巨大な石の塊が庭園に降り注ぎ、枝を折ってクレーターを作った。

きれいに熊手でならされた土。舞い上がる塵と灰が敷地を覆い、まるでうねる火砕流のように山腹全体を流れ落ちた。

神殿の残骸は激しい熱を帯びて赤く輝き、残された石材にひび割れが生じていた。

それでも温度は上昇し続け、神殿の中心にある滑らかな穴の側面は、染み出した樹液のように液状化した。神殿を取り囲む焼け焦げた木々は炎に包まれた。無傷の門石はクレーターの中心から突き出ていた。石の中心にある穴は、胆汁のような黒い霧で濃く不透明になり、それが渦を巻き始め、

ゲートストーンからは、硫黄ガスのように濃密な、粘り気のある刺激性の雲のように、煙が噴き出していた。

雲は火口から立ち昇り、より軽い灰の下を漂いながら地面に張り付いた。それは消散することなく、沸騰する塊として集まり、

庭の緑が後に残る。そして、無傷の空き地で、それは止まり、しばらくの間その場で渦を巻いた後、内側に巻き込み、中心で合体した。深い積雲の中の雷雨に似た光の弧が閃光を放ち、塊の奥深くで形が形作られていった。最初は影だったものが、密度と構造を増し、ついには肌の色を帯びた。雲が薄くなり、広がる膜状の翼を持つ裸の女性が姿を現した。腰まで届く髪は黒檀のように黒く、絹糸のように細かった。彼女の目と爪は、ゲートストーンのように黒く輝き、死神のように青白い、ほとんど半透明の肌と強いコントラストをなしていた。

その美しさは、イヴ自身にも匹敵するものがなかった。彼女は不浄なるルシファエル、竜、魅惑的なリリス、輝く明けの明星、古代のヘイレル、そして地獄の母なるサキュバス 幾世紀にもわたって伝えられてきた無数の名前を持つ。具現化したルシファエルの霊は、多くの女性の声で吐き捨てた。

「あと一人！あと二人」と彼女はため息をつき、破壊の様子をじっと見つめた。

彼女の周りでは、消えゆく霧が悪夢のような光景を露わにした。寺の境内は煙を上げ、死体が散乱する廃墟と化していた。黒い野原が燃え盛る寺の残骸を取り囲み、外庭は干からびて焼け焦げていた。煤と炭で真っ黒になった小川からは湯気が立ち上っていた。盆栽はパチパチと音を立てて燃え、時折、一本一本が灰と燃え殻となって倒れていった。

立った。

ルシファエルは前に出て、地面から死んだ鳩をかき集めた。彼女は鳥を撫でながら思いやりのある人。「まだよ、坊や」と彼女はささやいた。「おいで」鳥は飛び起き、首が折れたかのように頭を揺らした。彼女はそれを撫でた。「そうね。戻ってきて、小さな子」「1匹。」その目はゆっくりと開き、彼女の目と合った。羽ばたきをしたので、彼女はその首を掴んだ。彼女は鳥を顔に近づけ、深く息を吸い込み、もがき苦しむ鳥に向かって濃い硫黄の煙を吐き出した。鳥の羽は黄色く光った。

悪臭を放つ煙の中には、地球上のほぼすべての生き物にとって破滅の種が潜んでいた。なぜなら、そこにはアジア、そして最終的にはヨーロッパの大部分を腐敗させるほど恐ろしい致命的な細菌が潜んでいたからだ。その細菌とはペスト菌、まさに黒死病の元凶である。ルシファエルはニヤリと笑い、鳥に命じた。「よく聞け、小鳥よ。私の言葉を人々に伝えよ。私はすぐに私のものを取り戻すために来るのだ。」彼女は鳩を空中に放り投げた。鳩は旋回しながら南へ飛んでいったが、ルシファエルは灰の雲となって爆発し、カラスの姿に変わった。煙のような顔は敷地を横切り、門石の穴を通り抜けていった。

鳩はぎこちなく不規則に山の斜面を螺旋状に飛び、平原へと飛び出した。その影は小さな集落の茅葺き屋根をかすめ、野原を横切り、茂みを抜けていった。やがて、その鳥は

混雑した村の中心部で、それは発作を起こして地面に向かって落下し、建物の板壁に激突して押しつぶされ、賑やかな村の市場の魚屋台の後ろの地面に止まった。夕暮れが訪れ、市場が空っぽになると、誰も死んだ鳥に気づいた者は誰もいなかったが、あたりが暗くなり始め、死骸から発せられ始めた病的なほど淡い光を見る者は誰もいなかった。

ハトは体が硬直し、冷たくなっていったが、羽毛は依然として不気味な黄色い光を放っていた。夜明けとともに、2匹の黒ネズミが死体を見つけた。1匹のネズミは匂いを嗅ぎ、片方のネズミは大きく開いた目を見つめ、もう片方はその尻を嗅ぎ、どちらも死骸が新鮮だと分かると、むさぼり食った。しかし、このおぞましい宴が終わる前に、一人の男が魚屋台に近づき、緑色の背中をしたハエを追い払い、重くて乳白色の目をした魚を屋台の粗い板の上に叩きつけた。ネズミたちは鳥の肉の中に潜む病原菌に満たされ、一目散に逃げ去った。

ネズミは巧みな腐肉食動物だったが、ネズミを人知れず食い荒らす寄生虫の方がさらに効率的だった。寺鳩とともに市場に運ばれてきたバチルス菌はネズミの体内で増殖し、ネズミを寄生するノミにとって生きたシチュー、死の魔女の秘薬に変えた。ノミは細菌の影響をあまり受けなかったものの、感染したネズミの血を貪り食い、すぐに

病原菌は、次の食事の準備をする次の宿主の体内に吐き戻された。ハトがまるで天からの恵みのようにネズミの市場の巣穴に落ちてから2週間後、ノミは村中のネズミに病原菌を拡散させた。

ネズミが死に始め、ノミはより健康的な餌を探し始めた。ネズミの個体数を激減させたこの病気もまた、新たな繁殖地を求め、何十億ものノミの胃の中で新たな宿主を見つけた。そして、次の犠牲者、すなわち人間へと感染が広がった。

この穏やかで晴れやかな朝、若い中国人の少女が、呪われた鳩が着地した場所からほんの数フィート離れた農産物屋台の上に山積みされた、束ねられた黒生姜を調べていた。少女は小さな束を指さし、露店を営む老婆にいくらで売ってくれるのか尋ねた。老婆は歯のない笑顔の前で7本の指を振った。少女はにっこり笑って承諾した。「妥当な値段だわ」。老婆は少女から小銭を受け取り、束ねた根菜を差し出した。その時、若い客は悲鳴を上げて露店から飛び退いた。「ネズミよ！」と少女は叫び、愛想の良い顔は嫌悪感で歪んだ。「ネズミが走ってきて…私の足。

女性は笑いながら、気だるそうに手を空中で振った。「ただの害獣よ」と彼女はにやりと笑って言った。「食べ物がたくさんあるから、すっかり大胆になって、まるでペットみたいね。」

少女は購入した品物を受け取るために手を伸ばし、老婆から離れたいと願った。そして彼女の「ペット」たち。足首にチクツとした痛みを感じた老婆は、再び露天商から身を引いて、長いスカートの裾をまくり上げ、素足を見せた。彼女は眉をひそめながら、もっとよく見ようと身をかがめた。その拍子に、彼女がかぶっていた幅広の麦わら帽子が地面に落ち、通りすがりの商人がそれを踏みつけた。ありふれた不幸に面白がっている様子の老婆は、笑い声をあげた。少女の鋭い視線は、老婆の笑いをさらに大きくした。

「みんながあなたみたいに不運だったら、夜明けまでにはみんな死んでるわよ」と老婆はけたたましく笑った。少女は、この陰鬱な哲学のどこがおかしいのか理解できず、帽子を拾い上げて再び頭にかぶった。少女が生姜の束と汚れた帽子、そしてノミに刺された跡を抱えて足早に立ち去り、人混みの中に消えていくと、老婆の嘲笑が聞こえてきた。

その一撃は、たとえ小さなものであったとしても、既知の世界のほぼ半分を飲み込むのに十分な大きさであることが判明した。

わずか数日のうちに、発生した疫病は津波のように中国の村を襲った。大地に最も近く、地上を這う動物や昆虫と最も接する子供たちが、最初に病に倒れ、命を落とした。感染症の罹患率は骨までも達した。

恐ろしいことに、感染率は75パーセント近くまで急上昇した。温暖な冬は病気の蔓延に理想的な条件を提供し、これから訪れる暖かい気候は人間にとってさらに壊滅的であり、細菌にとってはさらに好都合となるだろう。地獄は喜ぶことはないが、この悲劇的な人間の感染の瞬間、ルシファエルは陽気に踊った。人間は熟していた。温暖な気候は死神にとって豊かな収穫をもたらすのに理想的であり、死神は常に研ぎ澄まされた輝く鎌を手にも、熟練した雇われ人のように、豊かな収穫を待ち構えていた。

ペストに感染した人々は、病原体が免疫系を徹底的に破壊したため、突然死した。病原体はリンパ節を攻撃して破裂させ、リンパ節を機能不全に陥らせた。被害者の体は、身を守る間もなく、完全に圧倒されて倒れた。出血した血が被害者の皮膚の下に黒い斑点となって溜まり、感染した体液 血液、汗、排泄物 は恐ろしい悪臭を放っていた。

腺ペストは地獄の巧妙な策略の一つだった。ルシファエルの息は狡猾で、彼女の望みは敵を完全に滅ぼすことだった。そのため、ペストは化学的な変幻自在の病原体となった。ある形態で成し遂げられなかったことを、別の形態で成し遂げたのだ。病は変化し、第二波の感染が人間の生活の場を暗く舞い、そして第三波が続いた。肺ペストは犠牲者の肺に感染し、そこで急速に増殖したため、不幸な犠牲者の胸腔は感染後数日で腫れ上がり、血液で満たされた。腺ペストから生き延びた者もいたが、肺ペストは容赦しなかった。さらに悪いことに、感染は咳やくしゃみで容易に伝染し、死が空気中に満ち溢れた。

3番目の感染形態は、最も致命的であることが判明した。敗血症性ペストは血液を攻撃し、体組織のあらゆる粒子を猛烈に増殖する桿菌で満たした。犠牲者は数時間以内に死亡し、内臓は文字通り、非常に感染力の強い血液のプールの中で液状化した。肺感染型のペストと同様に、敗血症性感染症もほぼ100%の致死率であった。

疫病は発生源から急速に広がり、田園地帯を席卷した。疫病にさらされた周辺の村や町の4分の3は、数日のうちに壊滅した。その後数週間、感染した死体が何十万体も野原に散乱した。感染を恐れて埋葬する者はほとんどいなかったからだ。ハエの個体数は急増し、腐敗した死体は幼虫にとって格好の温床となった。国の発展した地域では、黒焦げに膨れ上がった死体の悪臭が濃く、死の村の臭いは風下16キロメートル近くまで漂っていた。何万人もの人々が人里離れた未開拓地に避難を求めて、大規模な移住が始まった。

パニックに陥った旅人たちは、腐敗した人々の遺体、時には村全体が散乱している舗装道路を避けた。田舎道は、死んだ馬に繋がれたままハエがたかる荷車で塞がれていることが多かった。死と腐敗は至る所に蔓延していた。

疫病が猛威を振るい、人々はその奴隷となった。大疫病は16年間の苦難の中で3500万人以上の中国人の命を奪ったが、それでもなおその勢いは衰えなかった。疫病は静かにメソポタミアと小アジアへと進軍し、中国と同様にこれらの地域を荒廃させ、まるで復讐心に燃える略奪者の群れのように大陸全体を席卷した。

病はアジア文明のあらゆる血管を駆け巡り、モンゴルの中心部を貫く交易路を辿った。東洋の品々を地中海へと運んだ古代のキャラバンルートであるシルクロードは、今や死神の召使いをヨーロッパへと運んでいた。まさに死は、腐敗臭を漂わせる悪臭を放ち、大地を汚す不浄な風のように吹き荒れた。その忌まわしい悪臭は、天さえも麻痺させるほどだった。こうして、歴史上の恐ろしい出来事が必ずそうであるように、ルシファエルのメッセージが各地に響き渡った。彼女は間もなく自らの領土を取り戻すだろう、と。

【第1章終了】



この文学作品は

d専ら献身的に

エドガー・アラン・ポー (1809年 - 1849年)

—彼の遺志が私たち一人ひとりの心の中で生き続けることを願います—



~[GothicNovel.Org](https://www.gothicnovel.org)~